

令和 8 年度 道徳部会研究計画

1 研究主題

いかに生きるべきかを自ら問い続ける子供を育てる道徳教育

2 研究主題の主旨

(1) 研究主題設定の背景

現代社会は、社会全体の構造変化が進み、これまでにない転換期を迎えている。特に生成 AI をはじめとするデジタル技術の発展により、情報の扱い方や人々の関係性が大きく変化し、独自の発想や視点に価値が置かれるようになってきている。このような転換期の中で、子供たちに求められるのは、単に知識を習得することではなく、生きて働く「確かな知識」を基盤に、正解のない問いに向き合いながら自らの考えを形成していく力であると言える。さらに、多様な他者と協働し、よりよい合意を模索していく力は、民主的な社会の基盤を支える重要な資質である。

道徳教育の目標は、「自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うこと」である。異なる価値観をもつ多様な他者と、当事者意識をもって対話を行い、問題を発見・解決できる、「持続可能な社会の創り手」を育てる必要性が高まっている。さらに、主体的な判断の下、他者とともによりよく生きるための基盤となる道徳性は、一層重要となり、学校教育全体を通して行う道徳教育の充実が欠かせない。

そのため、道徳教育の要となる道徳科の授業においては、子供一人一人が、ねらいに含まれる「道徳的諸価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習」を、どのように実現していくかが問われている。

その実現に向け、令和 7 年度には鳴門市林崎小学校において、「主体的に考え、伝え合い、共に伸びる道徳科授業」を研究主題に掲げ、実践的研究が行われた。児童が自分の考えをもって授業に参加し、他者との関わりの中で学びを深める授業づくりに重点を置くとともに、チーム制を導入した授業改善や、子供が道徳的価値を自分自身の生き方と結び付けて捉え、多様な考えにふれながら、自分なりの考えを深めていくための発問の工夫、意見を伝え合う活動の充実が図られた。

成果として、発問の工夫に重点を置いた授業を展開していくことで、子供一人一人が主体的に考えることができるようになったことが挙げられる。また、様々な伝え合う工夫を重ねることにより、子供同士で活発な意見交換が行われ、自分の考えを積極的に伝えようとする姿が見られるようになってきたことも成果の一つである。

上記のような道徳科の授業を実現するには、この林崎小学校での研究成果を活かし、他者との対話の中で、自己の生き方について問い続けることができる子供を育てる必要がある。

以上のことから、正解のない問いに向き合うことを通して自らの考えを形成し、多様な他者と対話を重ねて、よりよく生きていくことができる子供を育成するために、「いかに生きるべきかを自ら問い続ける子供を育てる道徳教育」を研究主題として掲げる。

(2) 研究主題について

●なぜ「いかに生きるべきか」を問い続けることが求められるのか

生成AIをはじめとするデジタル技術の進展や社会構造の急激な変化により、現代社会は将来を見通すことが難しい状況にある。人口減少や価値観の多様化が進む中で、社会の在り方や個人の生き方に対して、あらかじめ用意された正解を当てはめることはますます困難になっている。このような時代においては、正解にいかに早く到達するかや、効率よく成果を上げる力だけでなく、正解が一つに定まらない課題に向き合いながら、自ら考え、判断し、意味を見いだしていく力が求められている。だからこそ、子供一人一人が「いかに生きるべきか」を自らに問い続ける姿勢を身に付けることが重要となっている。

また、次期学習指導要領に向けた論点整理（令和7年9月）においては、「生涯にわたって主体的に学び続け、多様な他者と協働しながら、自らの人生を舵取りすることができる民主的で持続可能な社会の創り手を『みんな』で育む」ことが示されている。そこでは、当事者意識をもって自分の意見を形成し、多様な他者と対話しながら合意を図っていく力の育成が重視されており、子供たちが社会の中で自らの生き方を主体的に選び取っていくことの重要性が改めて示されている。

●自己の生き方を考え続ける道徳教育

道徳教育は、子供が自己の生き方を考え、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とし、学校教育全体を通じて行われるものである。家庭や地域を含む様々な生活の場において、子供は多様な人々との出会いや様々な出来事との出会いを通して、自分の在り方や行動を振り返りながら成長していく。こうした日常の積み重ねの中で、自分はどのように生きていくのかを考え続ける姿勢が育まれていく。

現代社会は価値観が多様化し、必ずしも一つの正解が示されるとは限らない状況にある。経験した出来事を自分事として受け止め、時に迷い、葛藤しながら、自らの生き方を省みていくことが求められる。道徳教育は、特定の価値観を一方向的に押し付けるものではなく、子供一人一人が他者や社会との関わりの中で、よりよい生き方とは何か自分なりの考えを形成していこうとする内面的資質を育むものである。様々な価値観に触れながら、自分の考えを見つめ直し続けることが、自己の生き方を考え続ける力の育成につながっていく。

●いかに生きるべきかを自ら問い続ける学びとしての道徳科

学校における道徳教育は、教育活動全体を通して行われ、その要として道徳科が位置付けられている。道徳科では、教材との出会いを通して道徳的価値に触れ、それを自己の生き方と結び付けて問い直していく学習が展開される。その際、多様な考えと向き合いながら自己の考えを深め合う「考え、議論する」学習が重視されている。しかし、令和3年度に行われた道徳教育実施状況調査において、対話を通じた深い理解や多面的・多角的な見方を引き出す指導に課題を感じている教員が多いことが示されており、徳島県小学校教育研究会道徳部会が実施したアンケート調査（令和7年11月）においても同様の課題が浮き彫りとなった。

道徳科の学習では、子供が登場人物の葛藤や選択の背景にある道徳的価値に気付くことで、自らの価値観を見つめ直すきっかけが生まれる。教材を通して他者の思いや立場に触れることは、「自分は何を大切にしているのか」という自らの価値観に気付く契機となる。その価値観は、対話や省察を通して揺れ動き、意味を問い直され、再構成されていく。このような過程が、子供に自己の生き方に関

わる問いを持続させる素地となる。そのためには、教師が指導要領に示されている内容項目を手掛かりとして、教材に描かれている状況や人物の考えを分析し、価値の意味や働きに迫る発問を構想することが求められる。価値が普遍性をもつ一方で、個々のもつ価値観はそれぞれの経験に根ざすものである。道徳科の学習は、その両者を照らし合わせながら、子供のもつ価値観を揺さぶり、問い直していく場となる。

さらに、多様な他者との対話を通して、一面的な見方を多面的・多角的な見方へと広げることで、「自分はどう生きたいのか」「何を大切にしたいのか」と自己の生き方に関わる問いを深めることができる。この問いは「正解」に収束するのではなく、振り返りや内省を通して自らの価値観や行動を調整し続ける営みである。道徳科は、こうした問いを生涯にわたってもち続けようとする道徳性を養う教科であると言える。

「いかに生きるべきかを問い続ける子供」とは、普遍的な価値と個人の価値観の間で揺れ動きながら、自ら問いを立て、多様な他者との対話や省察を通して、自分の価値観の意味を確かめながら生き方を模索し続ける存在である。道徳科の授業は、その内面的な働きを支え、自己と他者、社会をつなぐ「心の学び」を豊かにしていくことが求められる。

3 研究内容

① 学校全体で取り組む道徳教育の推進と、その中核となる道徳科との連携

- ・教職員が共通理解をもって指導に当たるための研修や協議の充実
- ・道徳教育推進のための年間指導計画や体制づくりの工夫
- ・家庭や地域社会等と連携し、子供が実生活の中で価値を実感できる体験的な学びの推進
- ・各教科等・特別活動を通して、道徳教育を推進するための補充・深化・統合を意識した連携の促進
など

② 道徳科の質的充実を図る教材の工夫と活用

- ・「考え、議論する」道徳の授業を中心とした授業改善の工夫
- ・地域に根ざした教材「郷土の偉人」等を活用し、道徳的価値が実感できる教材の活用の充実
- ・子供の実態や時代の課題等に応じた教材の開発や活用
- ・教科書教材の提示方法の工夫やICTを利活用した指導の工夫
など

③ 子供を認め、励ます評価と指導の改善

- ・自らの成長を実感し、意欲の向上につながる個人内評価の充実
- ・振り返り活動やポートフォリオの活用による自己評価や相互評価の工夫
- ・家庭や地域社会等との連携を通じた、子供の成長の共有と学びの支援
- ・校内での協議を通じた評価の在り方と指導の一体化
など